

表紙, 目次, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38664

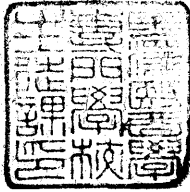
明治三十六年十月十七日發行

十全會雜誌

號九十二第

《品實非》

全澤醫學專門學校十全會



十全會雜誌第貳拾九號目次

○原著

○眼險軟骨ニ於ケル管狀葡萄

狀腺ニ就テ

醫學博士 高安 右人

○小腸肉腫ノ一例

醫學得業士 小西 俊三

○子宮纖維性筋腫ト多房性卵

巢囊腫併發症ノ一例

醫學得業士 越野義三郎

○漫錄

○旅行私信

ノ 八 十 日 生

○河野隆君を悼しむ

有 壁 す み れ

○會報

○叙任及辭令○會員動靜○高安校長の學位受領○山崎教授の近況○横山彰氏の歸朝○松原三郎氏の海外留學○石川教授の著書

○通信

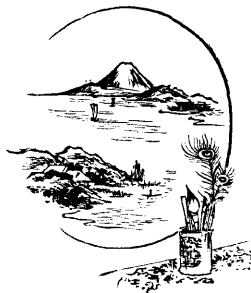
○山崎教授の通信○松原三郎氏の通信○時國良作氏の通信○渡守貞氏の通信

○公文

○内務省令第十號○内務省令第十一號○臺灣總督府令第五十七號

○會告

○寄贈及交換書目○會費領取○會員諸君に謝す



本病ノ如キ子宮纖維性筋腫ト卵巢囊腫ノ合併症ハ實地上目撃スルヲ屢々アリ且ツ治療上ニモ一汎腫物ノ剔出ト異リタル點ナク格別ニ興味アルニアラサルモ兩腫瘍頗ル大ニシテ術後良経過ヲ取リシト卵巢病患ト子宮疾病ト相關聯スルモノタルノ一例ヲ舉ケテ參考ニ供セシノミ本稿ヲナスニ當リ恩師小川教授小西講師ノ甚ナカラサル便宜ヲ與ヘラレタルヲ深ク謝ス



漫 録

○旅行私信 ノ、十口生

此編はノ、十口生より小川教授に送られたる通信なるが同教授の許諾を経て之を本欄に収録することとせり (編者)

百間一見に如かずげに旅は生きた學問なり、去月十日頃村上、宮田兩教授か白山登行を企てられたる折切に「行せんと思ひしも徒らに其非番ならざりしを啣つのみなりき、偶北國紙上歸省中の早稻田大學生富山縣人

百餘名が大舉して北陸三縣の歸京學生を誘ひ、八月下旬より九月上旬の間に有名なる佐々成政のザラ〜越と嶮峻なる針木峠を踰る信州に出て歸京するの報を齎らせしを以て、生平の鬱をやり脾肉の嘆を充すの機いたれりとし、在富山の文科大學生某々等々深く其無謀と危險なることを誡むるをも聞かず直に發起者なる立山村字岩崎佐伯氏が許へ同行を申込みぬ、越へて本月一日いよ〜出發の日は來りぬ、集る者聊に六人云く早稻田大學政治科生佐伯、松井、田邊氏東京商船學校航海科生西島氏東京帝國大學工科大學造船科生寺島氏

及生、

歸來登院すれば小川教授突如先日來の通信を其儘一纏にして十全會に投せよと命ぜらる、われ其不意に驚き拙なる日々の私信他に示すべきものにあらざるの故を陳して固辞すれども聽されず、白山紀行かあれは嘸よかりしならんにとて原稿紙の世話までせられぬ、乃ち頭かきつゝなぐり書よ寫し取りぬ、もとゞ端書便其面一定の限あるを以て十分の一をだに記する能はず、見ん人乞ふ其不遜と拙劣を一笑し附せられなば幸甚の至なり

○第一信 拜啓陳者今朝金澤發下り一番にて着富古鍛冶町松井氏方に至り同行者と合し申候同行六人生には初對面の人々のみに候町端まで三五の人に見送られ、日は頂邊よりわりつけ風死して路やけたる間を日射病でも起し相に三里廿餘丁なる上瀧町に漕附申候、こゝにて白米一斗の搗き上るを待ち只今常願寺川を渡り當岩崎佐伯氏宅に着候、上瀧に至る間浮塵子發生の爲巡査を附して強制

的に驅除撲滅致居候處間々有之候、午后一時より上瀧青年會討論會あり題うんり蟲と、以て其一半を御察可被下候、今夜は本宮か、原にて宿、(下畧) 九月一日午后四時 中新川郡立山村字岩崎佐伯氏方にて

○第二信 只今温泉場着、毎年六月五日より十一月五日迄支配者來住の上浴客を待つものに候、豚小屋同様のもの數棟有之一支配者の下に管理せられ候、多きときは六七百人にも及び鮮亘敷と云ふ有様なる由なるも目下は百五六十に過ぎすと申候、岩崎より昨泊したる本宮まで二里半、本宮より温泉場迄五里半殆んど常願寺川に沿て川原又は山腹を辿るものに候、蜀の棧道とやらんも斯くやと忍ばれ候處も有之候、九十九阪の如き上り廿丁眞に其名に負かず候、明日はザラ／＼越を通り四里にして黒部川の上流を渡り上り三里の針木峠を經信州大町に出つる豫定に候、若し途中やり切れざれば野宿ならぬ山宿と覺悟致居候、最心痛に堪へざるは黒部の水量如何により空しく引返す事になるかも不知候、今しがた恐るべき夕立

致し一同顔見合せ居る次第に候、大町迄十一里と申すも誰あつて測定したと云ふよもあらねば五十丁一里もあるべく候、其道の如き甚た難澁と及聞候、昨岩崎にて雇入たる中語の云く今明の道を比較すれば二間道と峠道との如しと

昨夕途中にて老婆が穉白兒を呼ひ立つるにコン畜生又は餓鬼と云ふべき所にキダモノなる言葉を使居候、一寸異様に聞ゆ申候、岩崎以來不淨紙の代用として樹葉を用居候、昨夜の本宮の宿料晝の握飯と共に僅に廿八錢いと廉と覺候、九月二日午后二時 立山温泉場にて

○第三信 今午前四時燈をかゝげ行をいましめて温泉場發、尾花や笹をわし分けく歩を進め候事とて草葉の露の其座を通して下半身を浸し候、一里新湯の下に至る、雲騰致雨の勢凄じく、瀧をなして徒らに谷川に落去るのみにて何等の設備も無之候（因云元湯は溪流を隔て、二小屋あり方二間斗の湯槽すべて五つあり、漸次さますもの候、峠より瀧をなして湧出つる勢壯觀に候）、こゝよ

りは赤蕘紫白今を盛りと一時に咲き乱れたる艸花の裡を羊腸たる路につれ縫ひ上り、一里ザラ越の頂上へ達し申候、天晴大に佳、更に山を越ゆる谷を渡りて下る事二里黒部川の上流に出て候、長さ三十間余水急にして清冽、つめたきこと比すべきなく深さ股間に及ひ候、時方に九時、之よりは一層困難と聞き及たる上り三里の針木峠よかゝるものに候、而も直に峠にさしかゝるものにては無之二里の間淡流に沿て溯り磊砢極りなき石を攀ぢ水に入りあるは浮橋ならぬ丸木橋夢に入る心知して廻り候、生の如き石を踏みはづしてづぶ濡になり苦しきうちにも一興を買ひ申候、溪の尽くる處蟲々として豎板に水的上り道山はまさに頭上に壓し來り我等を一もみにもみつぶさん權幕、一進一停午后二時漸く頂上に喘き着き申候、信越二州の境何れを向くも山又山のみ候、ザラ越のそれと同じくこゝも亦五葉松など寒帶植物帯に候、之よりは下りよて候もてんで路なき事二里半余はしめ半里が程は崩れたるがけと氷河の上を身の毛もよだつ思ひて傍目もなら

ず不乱と迫る次第に候、あとの二里又維石巖々たる石の上を飛越へ、下るもの候、次て山路を通る一里半、はじめて信州は北安曇郡野口なる片山里に出て申候、刻は夜八時半何れも空腹と樺木の如くなりて屈伸自由ならざる脚とよりて最早うんざり致候、野口よりは遠一里なる大町に舊十三日の月を伴として十時着候、モローコなつてと頭へ頭、足は足で、足は茫乎たる頭を棄て、唯機械的の歩を移す斗に候、大町は北安曇郡の中央に位し人口九千郡役所中學校等あり其本通は廣さ十間町にも劣り申さず街區整然豫想外に候、當對山館の如き三階の高樓、金澤あたりにはとんと見ざるものに候、黒部川までは杣人の通ふ路あるも其以來はいつ人工を加へ候ものによ今はたゞ恐入る次第に候、杣小屋は常の如く呼ぶも杣人はソーマと長く引き候、針木峠には熊や猪の躰などをあざり候あと多く、胡桃大の甘き蕎麦なども有之候、氷河は地文などに出て候圖面其儘に候、いかな山家育の佐伯氏も遊易致され候により他は御推量被下度候、

九月三日深更 北安曇郡大町對山館樓上にて後記、ガラ／＼越より黒部川に至るの間中の谷なる所あり中語の話によれば去月廿七日こゝを通れる某中語あり遙か向ふの石の上に人らしき者ありしに依り大聲呼び立てしにムツ／＼匍ひ出たせり、就て見るに顔色憔悴形容枯骨さながら餓鬼の如し、すなはち温泉場につれ歸り浴客諸共世話せしに數日にして漸次快復するに至れり、彼は年廿七越中射水郡の者にして去る十三日立山温泉場を出て單身信州に踰ゑんとしたるも其路なきに迷ひ疲れ果てたる擧句たゞ蕎と水とのみに據り十三日間生き延べ居たる者なりと

○第四信 今朝は昨の疲で漸く十時出發、池田（戸數五百）を経て午後三時雁川の大橋を過ぎ明科停車場着、其間六里晝食と休憩時を除き二時間に三里の割合にてかけ附申候、實に若氣の至り手足爲に幾個もマメをてかし候、手指のものは先日來の杖の爲にて候、明科より松本迄は四里瀛車にて五時過一氣に着申候、此鐵道は信越線と中

央線とを連絡するものにて篠井鹽尻間四十二哩に候、先年工事を受負たる越中の佐藤助九郎と大町の某受負師との間に軋轢を生し、氣を以てはやる工夫間に一大慘狀を現はしたる由にて其死亡紀念碑は斯る名目を附せず明科の某寺に有之候、松本町は長野縣四大廣原の一なる松本平の中央よりありて國中第二の都會と云ふも其實長野市に比して人口も戸數も町數も廣褒も商業もより一步を進め居り候との事に候、從來交通不便なりし爲、つい實餘りあるも其名を得る事が出来なかつたと申聞候、金澤の如く道行く人までがノン氣なるに比し店の飾付と云ひ一般の人氣と云ひ中々抜目なく見受けられ候、蠶種紙が主産にて候、松本は舊戸田氏六万石の城下として尙天子闕あり中學校の保管にかゝり、夜中學寄宿舎に至り其髯胸よみつる服部氏の案内にて五層樓上まで一同下駄の儘上り候、破損甚しく明月よして此廢址を照らし草葉よすだく蟲の音までか哀を添ふに至りては一種不可思議の感懷よ打たれ申候、大町より明科への道坦々砥の如く由來雨量

少き事とて石川縣邊の如く石ころくならず候、學校は至る所壯大にして輪奐の美又尽せりてあります從て教育の進歩著しく學齡兒童の數は日本第一に候、村落と雖女生は海老菜式部で野外運動としてテニスを主になし居り候、農作は至る所豊稔で鼓壤の歡忍はれ候、大町松本地方は今か益で賑に候、村里で屋根の葺換、又は新築したる家の屋根の真中には一尺五寸余の竹に半紙一枚の御幣か立て、あり何かの迷信よやと思はれ候、言語は信州に入てより段々東京に近寄候、松本よりは福島安正、鳩山春子夫人か出て居られ候、九月四日夜十一時、東筑摩郡松本町字本町千歲館にて

○第五信 今朝松本より鹽尻まで再び瀛車の厄介に相成候、鹽尻峠を越て平野村の烟突を右手に眺下諏訪より上諏訪に至る五里の間秋陽燦くが如きと戦ひ午后三時到着候、鹽尻峠は俱利伽羅峠に似、其頂上より瞰下すれば周圍四里なる諏訪湖は鏡の如く翠巒之を繞り目を上くれば富士山は雲間より其上半を現し某法師が「信濃なる衣

が崎に來て見れば富士の上こぐ天の釣舟」と歌ひたる眞に餘韻の嫺々たる者有之候、下諏訪には諏訪明神の春ノ宮、秋ノ宮の二社あり、二月一日より春宮に八月一日より秋宮に遷座せらるゝ、又因り候、上諏訪にも亦諏訪明神あり、一神同体にて軍旅の守護神と云ひ十年及廿七八年役の故を以て國幣中社より進んで官幣中社に昇格したるものと聞え候、當地は舊松平出雲守三万三千石の舊城址は湖に接し今は公園と相成居候、諏訪の月は古來姨捨山の田毎の月と共に其名高しと聞き及ひ候も今晚と生憎夕方より曇り出し美人を天の一方と觀得ざるはいと遺憾に候、月明山水共蒼々、湖月林風相與清、とは行かずともせめて雲やがて月を呑みけり吐きにけりとでもなれかしとひたすら祈る所に候、當地方は生絲名産地として下諏訪に近き平野村の如き本國第一と承り候、夏繭との關係上先月二十三日より千蘭盆をなしたる由に候、目下は中央線の工事に忙はしく俗謡と雜貨店が最盛に候、人口六千、郡役所及實業補習學校あり目下郡會開會中にて時

來らんとする縣郡會議員撰擧の準備にや當館並に隣館に政進兩黨の有志者相對陣致居候處寧ろおかし候、當地に至る處温泉湧出し旅館には各大なる俗槽を供居候、渡邊兄弟の生地にして高山基重先生もこゝかと覺候、下諏訪秋の宮に金無地の一大衝立あり「威靈赫々」(階)從三位勳二等男爵渡邊千秋書、他の半に云く「感應如響」(小篆)正三位勳一等子爵渡邊國武書と其手蹟迄も一步を進居候處先者芽出度候

○第六信 今朝お客よりも旅屋が朝寢したる爲漸く七時出發、途中あつき儘御躰山神戸の鎮守の社や、机の墓原などに數時間晝寢を恣に致候、机は讀んで字の如く訓するも御射山神戸はミシヤマガードと呼ぶものに候、かつて博士井上哲次郎氏か國字改良論上神戸なる字を引き八種あまりの讀方ありとて批難せられたるがげよさる事と覺候、午后四時信甲の境なる國境橋を渡る之より甲府元標迄九里二十九丁卅二間に候、六時半甲州又入てより二里半なる當臺ヶ原着、上諏訪より九里半に候

國堺橋を過ぎてより間もなく雷鳴驟雨甚しくいたる、馳せて一小屋の檐下に佇み或者は既に敷居を進入り候、アキツ放しの空屋、御免と呼ぶも應ふ者なく候、暫くして家婦らしきもの背戸の方より來り匆匆と立ち去る、次て骨逞しき男入り來り頭から怒語て曰く誰と案内して人の家の敷居を跨きたるかと氣色共々荒々しく候、我等乃ち一本下から出て候處彼は顔を膨らかし苦がり切てう睨み居候、富山を出て、より雨らしき雨に逢はざりし我等、就中笠持たざりし我は、大に味噌を附け申候

台ヶ原の手前に白鬚の御料林有之候、亭々たる一帯の赤松道を挟みて連り真に目毎に候、台ヶ原村は戸數僅に百五十余山間の小邑よ過ぎざるも旅宿數軒あり目下諏訪地方より藪仲買入來り附近のものを買集居候故何れも滿員に候、室は凡て開放し客は知るも知らぬも只敷居を異にするのみに候、一方の喧噪放歌他客を迷惑せしむる頗る大、只今蚤が多いのと喧いと雨か降りしきることによりどーしても眠むられず燈をかゝけて記すること如此候、

甲州北巨摩郡菅原村字台ヶ原丸屋にて九月六日夜十一時
○第七信 本日午前五時台ヶ原發、雨はれて地かたまり歩き具合敷候、甲州に入りてより一里毎に路傍必ず大なる木標あり詳く里程記され候、古の一里塚も斯くやと忍ばれゆかしく候、十時四里なる韭崎着、こゝより甲府まで三里馬車により一時間にして着候、がた馬車は信州甲州おしなべて存し荷馬車と共に交通運輸機關の便益をなす事多く候、我等は今日はじめて實驗したるものにて候

富山以來未だ牛及荷車を見ず候、人力車はあるも少數に候、信州に入てより御嶽(或は淺間)御參詣かとは遇ふ人毎に尋ぬる奇問に候、居酒屋には必ず焼酒と銘打たるものを販賣致居候處信甲の人は酒呑童子の末葉かど疑はれ候、顔の方圓なる平安式美人多く見受候、甲州には何處も同じ赤痢病稍流行致居候、舊守は脱し難きものと見え當國も今か益に候
我か一行は最初信州松本にて隨意の行路を取る都合なり

しも先づ甲府まで共に來り候、而して棹尾の擧として一同富士登山をなす豫定なりしも今朝に及び主稱者なる佐伯、松井兩氏の疲勞的不賛成あり、之か爲に一行の間に動搖生じ然る上は致方なし當市にて任意解散すべしと云ふに決し豫定は豫定の裡に葬られ申候事かへすくも残念に候、生は一泊の上東京に向ふべく候、下畧、九月七日正午 甲府市縣立山梨病院向賣賣屋にて

○第八信 拜啓昨柳町二丁目甲陽館に一泊致候、四方山なる一閑地何程の事かあんと思ひしは大なる誤に候、鐵道馬車が遅くまで通ひ居り中々繁盛に候、甲斐絹及甲州葡萄は此國の特産に候、現今葡萄栽培及葡萄酒製造研究の爲二三の人を縣費にて佛國留學致させ居候由盛なる事に候、富岡敬明や田村怡興造、或は雨敬、若尾の徒を出したるの地に候、公園は夜見には確と見難りしも一寸念入りたるものに候、舊城址も可なり大、其後に停車場有之候、中央線全通の上は甲府松本諏訪の三地は嘸繁昌致すべく候、甲州よりの富士は山又山の上より一寸下界を

さしの予き候ものにて甚たしに候

今朝一番にて甲府發笹子峠あたりより空模様悪しく風に加ふるに雨さへ降り頗る冷を感じ申候、賃金四拾九錢なる猿橋驛に下車日本三奇橋の一なる猿橋を十丁余にて見申候、甲府より八王寺に出づる國道に架する長十七間幅三間なるものにて兩斷崖の間に川かせかれて狭く深く遅く凄く流るゝ桂川に寫真で見ると通りま杭なく又吊るでもなく崖より順序よく桁をつき出して其上に架したるものに候、名物と名所も六なもの無し争はれぬ諺も候、甲州には一種異りたる色々の詞がある様兼て及聞候も素より短時日の飛脚的旅行の事でもありましようが一向珍らしき方言も耳にしませなんだ、只停車場の名稱に異様は聞えませんでしたのは鹽山や猿橋のエンザン及エンケウと呼ぶ事に候、甲府八王寺間五十幾哩其間四十二の隧道殆んど全線路の三分の一を占め候、午後四時過武州に入てより未だ水田を見ずして飯田町停車場に着申候、詢に旅行の樂は爽然忙然て其眞意欲辯己既忘言に御座候

着京後讀賣新聞を見る、明日より斬馬劍禪の筆に成る東
西醫科大學の比較評論が出る相に候、一寸古き日本人の
あるを幸に手にせし所其風聞録に云く同社(讀賣社)に五
來素川(欣造)あり、素川佛語に通し文に才氣あり論文小
説俳句筆を下して成らざるなし頃日斬馬劍禪の名を以て
東西兩法科大學を比較評論して極力餘蘊なし云々と

早々敬具

九月八日夜 東京本郷區森川町一番地二四〇號

百目木方にて 某 生 拜

○河野隆君を悼しむ

舊級友有壁すみれ

芳草茂らんとして秋風これを散らし、明月明ならん
として浮雲これを蔽ふ、天乎、命乎、富者長へに貴からず、
王侯長へに存せず、爛熳たる芳葩、明朝たる秋月、亦一
瞬、天人を此地に生じ此土に奮ふ必ず要あり、然るに天
何の要するなくして、高調の理想、焦天の抱負、鬱屈た

る利器を懷抱せる君を滅す、われ天を疑はざらんとして
能はず。

混々たる麻犀の水は千古變へらざる碧玉を濺へ、峻

々たる臥龍の山萬代あせざる綠翠を含む、噫!

此間哀史の前半を作りて去りにし君! 夏去り秋來ると雖
とも君を蠻に見ず、秋鴈を送りて春燕を迎ふとも、あ、
又何れの地にか君を迎へん。

君は日南の地に生れ、長して笈を關西に負ふ五星霜、
庚子九月學に此地に遊ぶ、予や君を識りしもの亦此秋な
りき、爾來交遊既に四歳!

君性豪放不羈、奇才邁行時に人の意表に出づ、蓋し
君亦我級の一奇士(?)たりし、加ふるに君友情に厚き薄
費を割いて能く一學生を養ひ、君學業に勉なる常に籠寓
徹夜書に親しみ又體育を意にせず、悲しい哉! 實に是君
か病因の萌しなりし、君昨冬二豎の爲めに冒され又た、
ず、徒らに困難と苦痛と戦ひ、一身を無意味なる犠牲に
供し、漸く光明に近からんとする身を以て今夏忽ち白玉

樓上の人となる。

呵！良玉堅からずして、芝蘭瘁け易く、皎月夙に沈み、麗花早く散んず。

天君に贈るに炎天の奇才を以てし、君に奪ふに鼎盛の春秋を以てす、悼しい哉。

利器を抱いて施すに暇なく、胸中の素志未だ酬ゆるに到らざるに、玉山かげ忽ちに沈みて秋波空しく恨みを漂はすのみ。

咲いて散る花我これを惜しまず、蕾の枝を吹き折る風人これを何とかいふ。

嗚呼幽冥途遠く、九泉の地遙なり、問はんとして問ふ能はず、語らんとして語る能はず。

花ならば又來る年も契るべし、君に於ては何れの日か又契るべき。

臥龍山頭何時もながらの明月に對し、はしなく惡魔の手に奪ひ去られたる友の、蕭條たる悲運の影を、われ夕闇の空に悼しんでは轉た潜然禁ずる能はず。

昨日は膝を交へて學堂に談し、今日は幽界に向いて永く天涯を隔つ、思ふて茲に至れば哀痛の裡世路の果なきを嘆ず。

適ま一陣の秋風習々として來り、階前の落葉書窓を音ずるもの三五葉、北海萬里石ころ屋根の下、多恨の遊子をして轉た斷腸の思あらしむ。



會報

○叙任及辭令

愛知縣立醫學專門學校教諭ニ任ス 久保 武
十一級俸下賜 愛知縣立醫學專門學校教諭 久保 武

(以上八月十九日、内閣)

依願囑託ヲ解ク 金澤醫學專門學校講師 森島 彦夫

任金澤醫學專門學校助教授
五級俸給與

金原三郎

年手當金百圓給與

金澤醫學專門學校講師

村木維夫

(以上八月三十一日、本校)

次學年醫學科第四年級々長ヲ命ス

教授 大西克孝

次學年醫學科第三年級々長ヲ命ス

教授 宮田篤郎

次學年醫學科第二年級々長ヲ命ス

教授 村上庄太

次學年醫學科第一年級々長ヲ命ス

教授 石川喜直

次學年藥學科第三年級々長ヲ命ス

教授 櫻井小平太

次學年藥學科第二年級々長ヲ命ス

教授 高山基重

次學年藥學科第一年級々長ヲ命ス

助教授 林常雄

(以上九月三日、本校)

教授 櫻井小平太
教授 下平用彩

物品檢閱委員ヲ命ス

書記 高柳謙次郎

(以上九月十日、本校)

○會員動靜

▲生沼曹六氏 東京帝國大學醫科大學生理學助手たる同氏は過般東京慈惠醫院醫學專門學校の依頼に應じ本職の傍ら講師として同校の生理學授業と擔當せられ居る由

▲森田齊次氏 東京帝國大學醫科大學解剖助手たる同氏も前項專門學校の聘に應じ亦本職の傍ら同校講師として解剖學を擔當せられ居る由、因に記す同氏は先般東京小石川區小日向武島町七番地へ轉居せられたりと

▲橘薰氏 は先般共濟生命保險會社の醫員を辭し郷里福井縣丹生郡本堂に於て開業せられたり

▲富田稔麿氏 は過般赤十字社病院醫員を辭し兵庫縣神戸病院に就職せられたり

▲蓮村外男氏 は今般東京市芝區南佐久間町二丁目十八番地へ轉居せらる

▲森島彦夫氏 は多年金澤病院内科醫員として且つ本校講師として奉職中の處辭職の上先般金澤市高岡町に於て開業せられたり

▲東良平氏 も多年金澤病院外科醫員とし且つ本校解剖學一部授業分擔講師として奉職中の處先般病院醫員を辭し富山縣高岡市新横町に於て開業せられたり

▲岡島敬治氏 は解剖學の一部分擔講師として奉職中の處先般京都醫科大學解剖學助手久保君の後任として同大學へ入られたり

▲木村孝藏氏 は去る暑中休暇中來澤せられ暫時當地に滞在されたりしが歸途東良平氏の開業式に臨席されたりと云ふ

* * * *

▲渡孚貞氏 は卒業以來久しく宇都宮市に於て令兄渡甚三郎氏と共に開業せられつゝありしが此度其妻子を郷里に残して單身上京し入澤教授内科教室の介補となり本郷區森川町青雲樓に下宿し孜々勉學中なり

▲重本儀介氏 久しく石見國に開業中なりし同氏は來十月中旬頃に上京せらるゝと云ふ

▲久津木勝作氏 兼て入澤教授内科教室に介補となりて研究中なりし同氏は此度開設せられたる横濱市の野毛山病院内科主任に聘せられたり同病院は外科専門難波要氏が曩に死亡せし近藤與十氏の近藤病院を譲り受けて今般野毛山病院と改稱せられたるものなりと云ふ

▲河野勇氏 東京大學にありて内科、外科等を研究中なりし同氏は家事上の都合により去る八月下旬歸省せられたり

▲吉田幡誠氏 信州小諸病院に外科主任たりし同氏は去る九月上旬同院を辭して上京せられ目下東京大學にありて外科、皮膚病梅毒科を研究中なり

(右五項松原三郎氏の通信に據る)

▲横井元次氏 醫學科第三年生たりし同氏は今夏二豎の犯す所となり去る八月三日有爲の才を抱ひて空しく白玉樓上の人となる悲哉、例により茲に哀悼の意を表す

○高安校長の學位受領

本校長にして兼て我十全會長たる高安教授は豫て論文を提出され居られたる處去七月二十九日文科大臣より明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條に依り醫學博士の學位を授與せられたり其學位記並に論文審査の要旨は左の如くなりと云ふ

學位記

東京府平民

從五位勳六等 高安 右人

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ東京帝國大學教授會ニ於テ其大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリト認メタリ仍テ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ茲ニ醫學博士ノ學位ヲ授ク

論文審査ノ要旨

第一 老人環(獨文)

本病ハヒス氏ノ說ノ如ク角膜實質ノ脂肪變性ナルコ

トヲ信ジ居タルモフックス氏ハ之ヲ「ヒアリン」物質ノ沈著ナリト説キレーベル氏ハ「ヒアリン」變性ト石灰沈著ノ合併シタル者ト説キ是非判明セザルヲ以テ著者ハ自家ノ實驗ヲ施シ其脂肪變性ナルコトヲ証明スルヲ得且ツ之ヲ檢スルニハフレンミング氏液ハ不適當ニシテ「ズダン」液最モ適當ナルト又變性部ノ周圍境界ハ多ク階段狀ニ終ルコトヲ發見セリ

第二 眼瞼軟骨ニ於ル管狀葡萄狀腺(獨文)

本腺ノ存在位置本態等ニ就テハ未ダ確固タル定義ナク或ハ下眼瞼ニ多クシテ上眼瞼ニ少ク内眥部ニ多ク外眥部ニ少ク又或ハ病的ナリト云ヒ或ハ然ラスト云ヒ諸説未ダ一定セス故ニ著者ハ數十ノ材料ニ就キ之ヲ研索シ即チ本腺ハ病的ノ臟器ニ非ス必ず生理的ノ者ニシテ通例各人之ヲ有スルモ多少其位置多寡ヲ異ニス然レトモ概シテ外眥部ニ多ク内眥部ニ少ク下眼瞼ニ多ク上眼瞼ニ少ク其造構ハ全ク涙腺ト同一ニシテ必ず其副器ナルベシト

第三 鬱積乳頭(獨文)

一、鬱積乳頭ノ水腫的腫起ヲ起シ或ハ痙衝ヲ伴ヒ或ハ之ヲ伴ハズ然レドモ早晚視神經中結締織ノ増殖神經纖維ノ變性ヲ起シ終ニハ乳頭ノ萎縮ヲ繼發ス

一、變性以上ノ如クナルカ故ニ視神經炎トハ全ク同一視スベキ者ニ非ザルモ鬱積乳頭ニシテ炎症ヲ起スコトアリ視神經炎若クハ乳頭炎ニシテ乳頭ノ腫起ヲ起シ場合ニ依リテハ互ニ變轉スルコトアルベシ

一、本病ハ頭蓋内ニ於ケル腫瘍膿瘍等發生ノ爲内腔狹隘トナリ液ノ鬱積ニ依リ頭蓋腔ト交通スル視神經鞘間腔ニ鬱積ヲ起シ乳頭ノ腫起ヲ起スモノニシテ炎症ノ有無ハ敢テ關セズ又一眼ノ鬱積乳頭ハ通常眼窩内ノ疾病ニ起因ス云々

以上ノ論文ハ學術上有益ニシテ高安右人ハ醫學博士ノ學位ヲ授與セラルベキ資格ヲ有スルモノト認定ス

○山崎教授の近況

同教授は引續き奥國プラーグ府大學に在學せらるゝ由なるが至極元氣にて日々攻學に餘念なしと云ふ頃者我十全會に寄せられたる別項通信に徴するも以て其一斑を窺ふに足る可し

○横山軫氏の歸朝

去る明治三十三年春外科學研究の爲め英國へ留學せられたる同氏の獨、瑞西、米等の諸國を経て去八月下旬歸朝し去月郷里なる本縣石川郡旭村へ歸省されたるが其途次金澤へ立寄られたるを以て金澤病院醫員諸氏の發金にて氏の爲め一夕金谷館に晚餐會を開かれたり尙同席には我が校の教授諸氏其他市内開業の醫師も多く列席せられ頗る盛會なりしと云ふ今氏が學歴に就き傳聞するところを左に記さん

横山氏の明治二十四年本校卒業の後直に北海道函館に開業されたるが三十三年春外科學研究の爲め自費を以て歐米留學の途に上り先づ英國倫敦に行きて Royal

College of Physician and Surgery に入りて外科を專修し止まること一年半許にして獨國チュービンゲンに移りプロフェツッスル、ブルンス氏に就きしも其健康勝れざりし爲瑞西國のヘルンに轉じプロフェツッスル、コッヘル及ヤダッソンの兩氏に就き殊にヤダッソンの好遇を蒙りて同氏の助手となり皮膚病梅毒學を研究し「淋病ニ於ケル好えをじん細胞」と云へる論文を書き一年半許此の他に止まり夫より米國に航してニューヨーク、ボストン等を跋渉シ Buffalo University に入學して M. D. の學位を受け一年許にして Cincinnati, Chicago, Los Angeles, Sacramento, Oakland 等諸所の病院を視察しサン、フランシスコより歸路に就き八月二十五日横濱に著せられたりと云ふ

○松原三郎氏の海外留學

豫て本誌にも記したる如く久しく東京帝國大學醫科大學精神病學教室に於て精神病學及神經病學の研究に従事せられたる本會特別會員松原三郎氏は愈々來十一月七日横

濱出帆の香港丸にて海外留學の途に就かるゝと云ふ聞所に據れば氏は最初米國に航して、Pathological Institute of the New York State Insane Hospital; Columbia University; The University and Bellevue medical college 等に於て精神病學及び神經病學を研究し次で英國倫敦大學に入り最後に獨逸國に轉學せらるゝ豫定なりと云ふ尙其詳細の事は別項に掲げたる同氏の通信中に悉くせり。曩には横山軫氏の外科學及皮膚病を專修して歸朝せられたるあり、今亦夙に令聞ある松原三郎氏の新たに其専門學研究の爲め歐米諸國に留學せらるゝに遇ふ、吾人は我會員中より相踵いで是等有爲の士の輩出するを喜ぶもの也

○石川教授の著書

同教授は曩に「解剖描寫帖」なるものを著され以て斯學講習者に多大の便益を與へられたりしが今また「人體解剖學」の著あり其第一卷骨學篇は既に東京の吐鳳堂書店より發行せられたるが此篇は僅々百六十六頁の冊子に過ぎ

ざるも中に挿むところの鮮明なる圖書二百二圖の多きに達し加ふるに其所説の簡明なる寔に學生の記憶に便なる好著と謂つべし、最近發行の日本醫事週報「新刊瞥見録」に左の評言あり以て之を證する足らむか

人體解剖學第一卷 石川喜直著○吐鳳堂發行○菊版百

六十六頁○挿圖二百二○正價金九十錢

故今田氏の實用解剖學は己に稍々古び來れり、田口博士の改訂解剖纜要完成せば頗る見るに足るべきものあるべしと雖巻帙浩濶にして大成容易に望むべからず、

其他の解剖書及圖譜の如きは最早前世紀の遺物に屬せり、茲に於てか繁簡中を得て理解し易き良好の解剖書が醫學生間に渴望せられたると一日にあらず、此人體解剖學は一般醫生の此渴望を醫すべく生れ出でたるなり、實用解剖學は圖を多くして文章ハ全く圖の説明に過ぎず、簡便にして記憶し易き爲め一時學生間に非常に歓迎せられたれども、是れ學生を誤るものなりとて學者の之を非難するもの又少なからざりき、人體解剖

學は圖頗る多く殊に筋肉起止點の如きは着色を以て之を示し、軀裁は實用式に類似し而して却て至れる者、學生に歓迎せらるゝは勿論學者も亦首肯すべし、價の廉なるは一驚するに足る

* * * * *

* * * * *

通信

○山崎教授の通信

(六月十日德國ブラ
1ヶ府發十全會宛)

拜啓益御清廻奉賀候兎角御無沙汰勝御免被下度小生も無恙研修罷在候間御放慮被下度昨今は好時節にて遠足杯の催屢有之候此頃當地プラーグ府大學々生の Verein にて Lierentafel と稱する團體四泊掛けの Sängerfahrt を企て同團體出身の Doctoren も多數同行する故小生にも是非にと勧められ候故 Pfingsten の休暇にハ有之遂に客員となりて同行致し候則ち五月三十一日午前六時發の氣車に

て百餘名の學生學士教授等當地を發し同日十一時 *Put-
weis* と申す市に着す豫て同市共立麥酒醸造所より招待
を受け居り候故同所長及重なる役員停車場に出迎居り同
所にて亭主方と學生の團長 (*Obmann*) 交互儀式的演説あ
り夫より列を作り市街を練り歩く時兩側の二階三階より
妙齡の婦女等兼て準備し置ける所の *Bouquet* を一行に
投し歡迎の意を表す學生は夫を拾ひつゝ唱歌して行様中
々面白く有之候醸造所の内部を精しく參觀し後大廣間に
て晝食と麥酒の饗應あり席上演説湧くが如く又間々彼の
學生々活に有名なる所の *Salamanderwästen* をやらかし
一同 *ロハ* のビールに快酔し午後三時發別仕立の瀛車にて
同六時 *Krumman* と稱する今回旅行の目的地に着き同所
は有名なる彼の *Böhmervald* 山中の一都會にして *Sch-
warzenberg* と稱する *Fürst* の城あり人口三萬餘の小市
なれども西洋には珍らしき山水の景勝に富むを以て夏期
避暑の爲め各地より來遊するもの多しと云ふ偕て停車場
には市長以下市會議員紳士等樂隊と二頭の乘馬を用意し

て出迎居り主客の挨拶は「ブードワイス」の時の如く夫よ
り市へ向つて *Einzug* を爲せり市長以下先導し團長及び
副團長は盛裝し騎馬帶劍にて *Verem* の標旗 (聯隊旗の
如し) を押立て一行の前頭に立ち學生及び先輩連 (之れ
を年齢に關せず *alle Herren* と呼ぶ) 隊伍を形りて其後よ
隨ひ其様頗る嚴なり市街に入れば兩側より束花を投げる
こと雨の如く各家國旗を掲げて歡迎の意を表す市街を練
り中央の市場 (*Marktplatz*) に至り種々式事ありて後一
應兼て市にて手配し置きたる宿舍に就き八時より主客一
大 *Hotel* の大廣間に集合し學生紳士貴女吾々老學士連に
杯を擧げ *Beergesen* を爲し十二時退散翌六月一日は同所
城内の劇場にて學生の奏樂合唱等あり其夜又前夜の所に
て純粹の學生 *Kneipe* を催し其の席には無論紳士貴女も
相列し其の數三百餘名と稱す合奏及演説數十番有之非常
なる盛會なり外國人にて席に列せしものと小生と中山醫
學士外に *Norwegen* より來學せる一ドクトルにて都合三
名のみ就中日本人は乍殘念毛色も違ひ殊に吾々二人は身

長短く目立候爲め物好なる外人は悉く目をろばだて種々話柄を求めて談話を交へんとし余等の周圍之常又人山を爲す程にて半ば見せ物的よなつたと思へは五月蠅きこと無限始めはへち六ヶ敷獨逸語で語すは難澁たとか何とか道辭てれつばらい居り候處其中少々ピールの効目も顯はれこんな時ころ平生の鬱憤拂を爲すも妙ならんと思ひ日本開明の現状より説出し日本は世界の一大強國にして東洋平和の鎖鑰を握り陸軍は英佛獨魯の次きなるも海軍ハ魯獨の上に位し居る抔聞かせ又現時世界の中心は東洋の天あり君等東洋を知らぬ人間は世界の話をするに不足抔とちと法螺的に聞せやり候處常に黄色人種を輕蔑せる彼等も俄かに尊敬の意を表しかけしもをかきさことに有之候其の中に *Norwegian* ドクトル立て演説を始め候爲め團長より余等にも是非やつて呉れとの事よて是にて一番閉口今迄の氣焰も何處へやら迷惑至極に思ひしも遂に凡る左の如くやつた「先づ日本語と獨逸語とは根本的違ふから迎も流暢に陳ふることは出來ぬと前斷りを致し獨逸

の學問技藝特又余等の從事する醫學は獨逸より得たる所多くして獨逸は日本現時の醫學の本國とも稱すべきである又西洋現時の美術には日本より傳來せしもの非常に多きを見たり向後益相互の交通頻繁となり關係親密となれば社會の幸福を増進することと思ひ又兼々獨逸學生の社會又重きをなし社會亦之を優遇すると云ふことは故郷にて聞し所なれども本日此の盛宴又列し其實況を目撃し感嘆の至りである終りに臨んで此の一行を優遇せらるゝと同しく余等外客に對し滿腔の好意を與へらるゝを謝す」云々とやつて其の責を塞げり然るに毛色違ひの日本人も演説したとて頗ぶる評判となり翌日より市街を逍遙しても紳士めきたる人間は敬意を表する様になつた田舎は矢張り西洋にても田舎なりと感し申し候其の翌日則ち六月二日には朝城内の馬場にて土地の婦人唱歌會 (*Gesangsverein von Frauen u. Mädchen*) より寄附の朝食の饗應あり夫より *Schöninger* と申す高山に登り又 *Höhlitz* と申山村に百姓芝居 (耶蘇一代記を演ずるものにして歐羅巴

中に當所とバイエルン國の Oberamgau の二ヶ所にあるのみにして非常に名高き由)を見物致し候同夜は又 *Primm-Haus* に歸り學生紳士貴女の催しにかゝる舞踏會に出席

其夜一泊翌日余等は少數老學士連とプラーグの舊巢より歸り申候此行別に學術的利益を得し事なかりしも學生々活の状態は一層能く知得致し候種々注意致置たる点も有之候へ共就中感すべきは隨分ビールを鯨飲すれとも酔ふて狂態を演する等の事は毫も無之又克く團長の命令指揮に服從し如何なる場合までも規律を亂さゝることに候團長は年々學生の中より撰擧して其の職に就くとひ又所謂 *Fuchs, Fuchsmajor* 等種々分限に一定の制度ある事は己に百も御承知の事と存し候間之を略す先つは御疎音御詫旁々右御報知申上候敬具

○松原三郎氏の通信

(九月二十三日東京發、十全會宛)

拜啓何時もながら月日の駒の止まることもなく今年も東京も例年になき暑さなりと啣ちしも早や過ぎ去りて残暑

も尠なく將さに秋冷を催さんとする時候と相成候處貴會益々御隆盛の段奉賀候就而小生も前便にて申上候通り明治三十二年十一月以來當精神病學教室にありて該病學の研究に従事致居候へ共何分不肖のこと故學業も相進み申さず候中に年月を數ふれば最早滿四ヶ年間と相成り今更ながら驚き居候此上何時までも碌々として相過ごすべきこと小生の本望にも無之候故數年來企圖し、ありし外國留學を此際實行することに決心仕り來十一月七日香港丸(東洋汽船會社所有)にて出發すること、相定め申候夫故來十月二十日頃一旦歸省し十一月一日に歸京し七日も出立すべき豫定に御座候

當時醫學研究の最も隆盛なるは云ふまでもなく獨逸國の醫學界にして醫學研究のため外國に遊學すると云へば聞までもなく獨逸國か奧斯太利國のこと、早合点する位に御座候夫故若し人ありて余は醫學研究のため獨逸以外の國に行かんと云はゞ可なり世人の驚愕を買ふならん就中米國に行くなりと聞きては頗る呆然たる人もあるべしと

思はれ申候小生は即ちそれにて初め米國に渡り後ち英國を経て獨逸に行く積りに御座候

『切角相當の時間と資金抛ち或一定の奮發を起し乍ら我日本醫學會よりも或程度か低きかも知れざる米國に行くは大に拙策なり』、『廣く各地を視察せんとするは宜し故に獨逸に行くを先きにして歸途一寸米國を通過すれば足れり然るに米國を先主にして獨逸を後にするは其前後を誤るものなり』など其他種々小生の爲に忠告する親切熱誠の知人慤からず候小生は知己の親切を悦んで感受仕居候へども小生にと小生丈けの觀る所あり又た期する所もあり又た小生の専門たる精神病學及び神經病學の研究上には特に便利なる所もあり且つ將來殊に有望なる点もあるべしと確信して米國を先主にしたる次第に有之候併し決して燕雀何ろ鳳凰の志を知らんやと濟まし込む次第には無之候故不惡御諒察下されたしと知己に詫び致居候小生は來十一月七日横濱を出帆して布哇へ寄港の節上陸することを得なば全島の病院等を參觀し十一月二十日頃

桑港に到看可仕候故全地より汽車よて新紐育よ向ふ積り候併し小生今度の遊學は或二三のことを深く研究せんとするよ非ずして小生の専門學科に關係ある事柄を可成廣く觀且つ普く聞くのが主眼に候故桑港上陸後は直ちに此趣旨を實行すること、なし新紐育へ行く途中にて主要なる大學、病院殊に精神病院、監獄(精神病者の犯罪)を參觀し乍らゆるく新紐育に向ふべき豫定に候然れども未だ米國の地理等に精通せざるが爲め旅行の日程を當地にありて定めること能はず候故桑港へ着きたる上にて參觀すべき個所を取調へ從て鐵道の線路をも定め度考に候へども小生が當地にありて小生一個人のみの意見に據り左の如く豫定致居候勿論左の豫定中には種々齟齬し或は時間的に甚だ不便にして實行し難きことあるやも知れずと思ひ居候桑港にて

University of California (in Berkeley)

Stanford's University (in Palo Alto)

Alameda Park Asylum for the Insane Cooper
Medical College
等を參觀して Oakland に行か

State University

を見て Benicia, Sacramento 等を經つ Reno に着か

State University

State Insane Asylum

を參觀したる後 Wadsworth, Winnemucca, Elko salt
Lake City (Utah University), Colorado springs, Limon,
Omaha, Elkin (Northern Insane Asylum) を經つ Chicago
に行き全地には小生の學友有之候に付て參觀も便利なら
んと存候全地には University of Chicago, University
of Illinois, Cook County Hospital, Northwestern Uni-
versity Medical School, Merer Hospital, Marine Hos-
pital, 等あり

夫より Kalamazoo (State Asylum for the Insane), Ann

Abor (University of Michigan), Detroit (Detroit College,

Marine Hospital, 高峯讓吉氏會社) を經て有名なる Sus-

pension Bridge を通過しながらナイアガラ瀑布を見物す
るはちと愉快なることならんと存候夫より Buffalo (Uni-

versity of Buffalo, Niagara Medical College, State Insane

Asylum, 横山軫氏の居られし所), Rochester (University

of Rochester, City Hospital, Mary's Hospital), Ithaca

(Cornell University), Utica (State Lunatic Asylum) 等

を經て新紐育に到着すべし豫定に付て桑港より通常一週
間未滿にて行くべしものを所々參觀せんばより二十日
間許りを費して旅行する積りに候

新紐育にては

1. The pathological Institute of the New York State
Hospitals of the Insane,

2. Columbia University,

3. The University and Bellevue Medical College.

にて精神病學と神經病學との研究に従事すべし豫定に御
座候就中第一の精神病學研究所は甚だ盛大なるものゝ如

く獨逸國にては之に匹敵するもの無きが如くに候全所よりは Archives of Neurology and Psychopathologie なる大雜誌を發刊し精神病學の専門的研究所たるに係らず左の如く各分科を設けて各科長あり大に小生の理想に適ひ申候

- | | |
|-------------|---------|
| Meyer | 研究所長 |
| Dunlap | 神經病理學 |
| Lerene | 病理化學 |
| Brooks | 病理學及黴菌學 |
| Deady, Onuf | 病理學 |
| Bookmann | 生理化學 |
| Herrick | 比較神經學 |
| Sidis | 心理學 |
| Winter | 人類學 |
| Busek | 圖書館主任 |
| Marie Onuf | 雜誌主任 |

Columbia University には左の如き諸教授有之候

- | | |
|--------------------|-------|
| Starr | 精神病學 |
| DeLafield, Prudden | 病理學 |
| Cattel, Farrand | 心理學 |
| Kinnicut, James | 內科學 |
| Chocker, Sever | 電氣治療學 |

The University and Bellevue medical College には左の諸教授あり

- | | |
|------------------------|-------|
| Macdonald | 精神病學 |
| Dundamm, Alpin | 病理學 |
| Fischer | 神經病學 |
| Smith, Fevre, Robinson | 內科學 |
| Ford | 電氣治療學 |

其他尙ほ機會あらば新紐育を出てノJohns Hopkin's University (Baltimore) の精神病學者Berkeley氏と尙ほ有名な神經細胞の病理學者James Ewing氏(Cornell University) との教室をも覗と度希望に候
米國に在ること一年半許りよして英國倫敦に移り倫敦大

學の精神病學者 Savasse 氏に就き三四ヶ月にして獨逸國に
移るべく候

獨逸國にては Heidelberg 大學に行き度考に候全大學には
有名なる神經細胞の病理學者 Lissl 及び精神病學者 Krae-
pelin の兩氏ありしに近着の新紙によればクレペリン氏
はミュンヘンに移りエーナの精神病學教授 Binswanger 氏
が其後任となられたり全氏は癩癩に關して有名なる人に
候其他獨逸國にて小生の専門學の若手にては Nielsen,
Weygandt 等の人も有之候へども小生が獨逸に行くには
凡そ二年の後なれば夫迄に學者の移動もあるべく候故目
下の處よては遊學地を確定仕らず候
明二十四日は上野公園に於て横山軫君の歡迎會を開くべ
き筈よ御座候何れ後報可仕候敬具

○時國良作氏の通信

(小川教授宛)

(前略)扱て餘り珍敷き事にも無御座候へ共往年種痘法に
就き愚見を十全會雜誌に報告せし際野田恩師の論文に鑑

み小生の實驗に因り我國の種痘は學理的普及にあらずし
て形式的普及なることを記載し置きしが今回本縣令に依
り七歳より二十歳の者に就て再三臨時種痘を我地方に施
行せしに其内痘痕を有せざるもの比較的數多く有之是等
は今回皆完全に善感し痘泡の發育并に經過等全く初生兒
の初種痘者と同一にして學理上初痘者なるにも拘らず法
律上再三種者と見做し今日迄放棄ありしなり何か故法律
上斯く取扱はれたるやというに何れも種痘は實際一回乃
至數回經過せし者なるを以てなり然れども痘痕を有せざ
るを以て見れば其都度不感に終りしものなるや明かなり
斯の如く再三不感に終りし原因は其一部種痘當時の一時
性免疫質もあらんか寧ろ多數は技術の缺點に基因すると
いうも敢て過言に非すと信するなり此一時性免疫質は種
痘規則に因り充分な防遏するを得るなり則ち同法第一條
よ種痘は小兒出生後滿一年以内に之を行ふへし若し不善
感なるときは更に一週年内に再三種を行ふへしと然るに
事實は之に反し初種に不善感なる時は多くの技術者は天

然免疫質に歸し敢て他を顧みず最早初種の義務を終へたるものとし前條後段の再三種を行はず同法第二條(種痘は善感後と雖とも五年乃至七年に再種を行ひ再種後五年乃至七年に三種を行ふへし)の五年乃至七年の後初めて再種を行ふ有様にて其期間即ち五年乃至七年間は未種痘者を同しく全く天然痘に對して免疫性を有せざる危険の分子を存置し何んろ良く豫期の効果を得へけんや一朝天然痘萌發したる時は是等の分子を傳ふて猛威を振ひ慘害の及ふ處難計嗚呼醫學の進歩を以て特に種痘の普及を以て任する我帝國にして此事あり種痘反對學者の好餌となり地下の大偉人「ゼンナー」をして泣かしむ亦再三種者の善感種痘の發育經過は初種者とは大に異なる様成書にあればとも今回余の實驗に因れば既に數多の完全なる痘痕を有するものにて初種痘瘡と殆んど同様なる發育經過を取りし者數多あり是等は何日實驗を重ねて公にせんと欲す地方の衛生は以上種痘の一事にても御承知の如く何事も形式上に流れ御粗末極まるものに御座候云々

○渡孚貞氏の通信

(十全會宛)

(前略) 生儀久敷晃峰の麓に碌々罷在り唯さへ融通のみかぬ頭に大分徽が生へ申し候まゝ洗濯旁々今回出京入澤内科の介補(久津木君の後釜)に化け申候老驚何を仕出かすか暫時御笑を忍んで御覽被下度願上候昨日迄は立派な先生が今日は一介の貧書生諸先生及び同窓各位へ一々御案内も申し兼ねる始末幸に會誌の餘白も御座候はゞ然るべく御吹聽伏して奉悃願候云々

* * * * *

* * * * *

公文

○内務省令第十號

飲食物防腐劑取締規則左ノ通定ム

明治三十六年九月二十八日

内務大臣 男爵兒玉源太郎

飲食物防腐劑取締規則

第一條 本則ニ於テ防腐劑ト稱スルハ左ニ掲グル物質又ハ之ヲ含有スルモノヲ謂フ

一 安息香酸

一 硼酸及其ノ鹽類

一 「クロール」酸鹽類

一 「フルオール」水素及其ノ鹽類

一 「フォルムアルデヒド」

一 昇 汞

一 亞硫酸及其ノ鹽類 亞次亞硫酸鹽類

一 「サリチール」酸及其ノ化合物

一 「チモール」

第二條 販賣ノ用ニ供スル飲食物ノ製造又ハ貯藏ニ防腐劑ヲ使用スルコトヲ得ス

防腐劑ヲ使用シタル飲食物ハ之ヲ販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ陳列シ若ハ貯藏スルコトヲ得ス

第三條 第一條ニ掲クルモノハ飲食物ノ防腐用ト稱シテ販賣シ又ハ目的ヲ以テ製造シ若ハ貯藏スルコトヲ得ス

第四條 第二條第三條ノ物品ニ關シテハ地方長官ハ明治三十三年二月法律第十五號第一條ニ依リ處分スルコトヲ得本則ニ違背シタル營業者ニ關シテ亦同シ

第五條 地方長官ハ本則ノ執行ニ關シ明治三十三年二月法律第十五號第二條ノ職權ヲ行フコトヲ得

第六條 第二條第三條ニ違背シタル者ハ貳拾五圓以下ノ罰金ニ處ス

附 則

第七條 本則ハ明治三十七年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

第八條 左ノ各號ノ場合ニハ本則施行ノ日ヨリ七箇年間本則ノ規定ヲ適用

セス

一 清酒ノ製造又ハ貯藏ノ爲別ニ定ムル試驗法ニ適合スル限度マテ「サ

リチール」酸ヲ使用スルトキ

二 魚介獸肉ニ硼酸又ハ其ノ鹽類ヲ使用スルトキ

三 魚介ノ貯藏又ハ運搬ノ爲「サリチール」酸又ノ其化合物ヲ使用スルトキ

四 前各號ニ依リ防腐劑ヲ使用シタル清酒、魚介若ハ獸肉ヲ販賣シ又ハ陳列シ若ハ貯藏スルトキ

硼酸、硼酸鹽類及「サリチール」酸ニ限リ前項ノ期間第三條ヲ適用セス

第九條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行フ

○内務省令第十一號

飲食物防腐劑取締規則第八條ノ清酒中「サリチール」酸試驗法左ノ通定ム

明治三十六年九月二十八日

内務大臣 男爵兒玉源太郎

清酒中「サリチール」酸ノ試驗法

清酒ニ立方「センチメートル」ニ蒸餾水ヲ和シテ百立方「センチメートル」ト

ナシ其ノ五立方「センチメートル」ヲ内容約五十立方「センチメートル」ノ分

液漏斗ニ取り之ニ稀硫酸（十「プロセント」）三滴及揮發石油（攝氏六十乃至

百二十度ニ於テ蒸餾スルモノ）十五立方「センチメートル」ヲ注加シ五分間

強ク振盪シテ靜置シ下層ノ水溶液ヲ除去シ殘留シタル揮發石油ヲ蒸餾水十

立方「センチメートル」ト共ニ強ク振盪シテ靜置シ茲ニ分離析出スル下層ノ

水溶液ヲ内徑約一、五「センチメートル」ノ無色試驗管ニ取り之ニ過「クロロ

ル」酸液（約一「プロセント」）一滴ヲ和シ直ニ白紙上ニ於テ上面ヨリ透視ス

ルニ呈色スヘカラス

○臺灣總督府令第五十七號

明治三十三年十一月府令第百八條毒藥劇藥品目中左ノ通改正ス

明治三十六年八月十五日

臺灣總督 男爵兒玉源太郎

劇藥ノ部中「コッホツベルクリン」ヲ削ル
同加刺拔兒豆ノ次ニ左ノ如ク加フ
ナフテリア血清

破傷風血清

同番木甞丁幾ノ次ニ「ツベルクリン」ヲ加フ

同硝酸銅ノ次ニ「ヂウレチン」ヲ加フ

同古組草及其ノ製劑ノ次ニ「鹽酸ヘロイン」ヲ加フ

* * * * *

會告

○寄贈及交換書目

(九月三十日迄領收ノ分)

臺灣醫學會雜誌 一〇、一三、	同	會
日本醫事雜誌索引 明治三十五年分 册	同	日本醫事年報社
醫事新聞 六四、二、四、五、六、	同	社
成醫會月報 二五六、七八、	同	社
中外醫事新報 五五九、六〇二、四、	同	社
日本醫事週報 四七、八、九、四〇、二、三、四、五、六、七、八、九、	同	社
藥石新報 四八、九、七〇、二、三、四、五、六、	同	社

東京醫事新誌 三四、五六、七八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、	同	局
醫海時報 四七、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、	同	社
校友會雜誌 九、	東京慈惠院醫學校	會
公衆醫事 七ノ三、四、五、	同	會
北越醫會會報 一三五、六、	同	會
東京醫學會雜誌 一七ノ一、三、四、五、六、七、八、	同	會
植物學雜誌 一七ノ一、九、七、八、	東京植物學會	會
產科婦人科學雜誌 五ノ七、八、九、	同	會
日本助産婦新報 六、七、八、	同	發行所
助産ノ乘 八、七、八、	緒方助産婦學會	會
醫科器械月報 一、四、五、	同	社
醫談 八、四、六、	同	發行所
藥學雜誌 二、五、七、八、九、	日本藥學會	會
廣島衛生醫事月報 五、六、七、	同	社
國家醫學會雜誌 九、五、六、七、	同	會
中央婦人科學雜誌 一ノ三、	緒方婦人科學會	會
順天堂醫事研究會雜誌 三、四、八、九、	同	會

日本消化機病學會雜誌	二ノ一、	同	會
中央醫學會雜誌	五、	同	會
大日本私立衛生會雜誌	二四、三四、	同	會
獨逸語學雜誌	五ノ二、三、	同	社
軍醫學會雜誌	二三、	陸軍々醫學會	會
日本眼科學會雜誌	七ノ七八、九、	同	會
北海醫報	三ノ四	北辰病院研究會	會
醫學中央雜誌	四、五、六、七、	同	社
岡山醫學會雜誌	一、二、三、	同	會
藝備醫事	八六ノ八ノ三、三、	同發行所	所
治療新報	一七、八、	同	社
學士會月報	一八五六、七、	同	會
產婆學雜誌	四、五、	日本產婆學協會	會
躬行會叢誌	一〇、	同	會
神經學雜誌	二ノ三、	日本神終學會	會
研瑤會雜誌	五、	長崎醫學專門學校	會
東京教育時報	三五、六、	東京市教育會	會

皮膚科及泌尿器科雜誌 三ノ三四、

同上第一卷第二卷索引 一冊

衛生談話 三、四、

校友會雜誌 三、

好生館醫事研究會雜誌 一〇ノ四、

第一回日本內科學會々誌 一冊

人體解剖學 第一卷一冊

校友會々報 四、

合衆國工一エル
醫科大學規則 外十冊貳葉

日本皮膚科學會

同 上

通俗衛生茶話會

京都府立醫學專門學校 會

同 會

日本內科學會

石川喜直君

石川縣立第一中學校 會

橫山 軫 君

○會費領收

(明治三十六年九月三十日迄)

金壹圓 (三十五年分)

國分金城君

金壹圓 (全上)

生沼曹六君

金壹圓 (全上)

大橋 豐君



！ 會員諸君に謝す ！

本號雜誌は前學年の終り迄に發行すべきものにして、去る八月中に發行の旨既に豫告致置きたるも、その遷延遂に今日に致りたるは、全く編者怠慢の致すところ、幸に會員諸君の御諒恕あらむことを乞ふ。編輯者